と畜検査について
（牛の内臓検査・白物編）

今回は牛の内臓検査について説明します。

一頭ずつ病変が無いか確認

内臓はと畜した後に体から取り出されます。牛の内臓はとても大きいので、白物（白色の胃腸など）と赤物（赤っぽい心臓や肝臓など）の2つに分けて検査します。全ての牛の内臓は、と畜検査員が各臓器に病気がないか、食用可能かどうか等、内臓の状態について1頭ずつ視診、触診等で検査します。この検査で、と畜検査員が「食用不適」とする異常があった内臓はその程度により一部または全部廃棄されます。

また、特定の病気の疑いがあった場合については、その内臓を含め、牛1頭分を一時保留し、精密検査を実施します。精密検査の結果によっては、その牛の全てが廃棄となることもあります。

【白物検査】

胃、腸、脾臓、膀胱、子宮等を検査します。腸内容物等で検査台を汚染しないよう、なるべく切開せず視診、触診、望診で検査します。牛の胃は4つに分かれていて、第1胃は「ミノ」、第2胃は「ハチノス」、第3胃は「センマイ」、第4胃は「ギアラ」または「赤センマイ」と呼ばれています。また、小腸は「ホソ」または「マルチョウ」、大腸は「テッチャン」、脾臓は「チレ」または「タチ」、子宮は「コブクロ」と呼ばれています。

白物検査で注意すべき病気としてリンパ節や脾臓の腫れる「牛伝染性リンパ腫」や腎臓や膀胱の結石が原因でおこりやすい「尿毒症」があります。特に牛伝染性リンパ腫は近年、増加傾向で注意すべき疾病の1つです。